

この偏依善導の旗幟は法然上人が浄土開宗に當つて樹立せられたものであり、その根本精神は法然上人滅する迄は法然上人にとつては何等変らなかつたのであるが、その表現方法の点に於ては差異がある様で、法然上人が六十六才の時の著と云われている「選択本願念仏集」に現われた偏依善導に於ては伝承血脉の問題にしろ善導大師の神格化の問題にしろ善導一師に帰する事を徹底的に強調しているのを見るもので、そこには何等かの理由がある事は想像するに難くない。

以上の卒業論文の一項から内面的な理由による法然上人の善導観を挙げて見たわけだが、頁次数の関係で外面的な理由が挙げられないのは残念である。

浄土三派の三心観に関する一考察

吉 田 真 弘

の悩みを解決し、心に眞の安らいを得ること、即ち安心立命を得ることであると云うことが出来る。この意味に於て法然浄土教に説かれる安心問題を正しく理解認識することは、重要な意義を有すると云えよう。

浄土教に云う安心とは、観經に説かれる至誠心、深心、廻向発願心の三心を指すのであるが、この三心をいわゆる安心として重要視したのは、中國では唐の善導である。即ち善導以前の曇鸞、淨影寺慧遠、嘉祥寺吉藏、天台智顗、道綽、慧淨、道闇、迦才等の浄土教諸師は、維摩經や華嚴經、起信論に説かれる菩提心としての三心を重視し、観經の三心をも同義異名であるとして、安心としての三心を説かなかつた様である。一方我國に於ても法然に至つて始めて安心としての三心を重要視したのであつて、法然が善導の観經疏散善義に説かれる三心釈を継承する迄は、いわゆる法然以前の良源、源信、永観、珍海等の諸師は、多少それに近い者はあつても、中國善導以前の諸師と同様維摩經や起信論中心の三心釈をとつていた様である。換言すれば善導法然の両者によつて三心を宗教の本質たる安心として理解され、浄土教の安心問題

は確立されたと考えられる。

しかし、法然門下に異義異説多く幸西、隆寛、証空、弁阿、長西、親鸞等はそれぞれ独自の教説を主張することとなり、従つて教義の中心たる三心に関しても異つた見解が出される結果になつたのである。この中現在その命脈を保っているのは、法然の正統と云われる鎮西派と親鸞の真宗、それに証空の西山派のいわゆる浄土三派であると云うことが出来る。従つて以下この三派の三心観に就いて略述せんとする

(一)

思うに、浄土三派いづれも法然の教えを継承する以上三心をその中心として重要視するに異論はないが、その理解の方法態度が問題となるのである。

先づ聖光房弁阿の主張する鎮西派は、徹選択集、浄土宗要集、念仏名義集等に三心を釈しているが、その三心に対する見解は、三心は行者の安心であつて衆生の往生を願求する心の中に因として生じる心的作用であり、この三心の至誠心は内外相応したる衆生の真実心であり、深心は仏の本願を深く信じて疑わさることであり、さら

にこれを善導、法然に従つて信機信法に分けて説き、廻向発願心とは自己の所修善根を真実深心の中に廻向して自他共に往生を願うことである。そしてこの三心は一心となつて称名念仏の行の中に一体となつた時救済はなされると説くのである。従つて鎮西派の三心は衆生の生起する三心であつて善導法然のそれと一貫したものをもっていると云える。

次に善慧房証空の西山派では、西山派はいわゆる生仏一体説を主張するのであつて、衆生の行を認めず仏体即行の立場をとるのである。従つて三心も鎮西派の如き衆生の生起せるものでなく、阿彌陀仏の真実心を領解する領解の三心であつて、どこまでも他力弘願真実を説くのであつて、衆生の三心は領解の心に他ならないのである。

最後に真宗では、衆生の行も理性もすべて否定し、唯仏真実の立場を説くのであり、三心もすべて阿彌陀仏の生起し給えるものであり、衆生は唯これを他力廻向のものとして信じ受けとると云う向下的の一面をのみ強調するのである。この点鎮西派が衆生から仏への向上的態度をとるのと対照的であると云えよう。

(二)

以上要するに三派の三心の特色を一口で云えば、鎮西派では三心は衆生の具足すべき安心であり、西山派では仏の摂取し給う心を受け取つて領解する領解の心であり、真宗では三心は阿彌陀仏の具足し給える三心であつて衆生には及ぶ所なきものである。この三派の三心觀は善導の觀經疏や法然の選択集と比較してみると、わずかに鎮西派に於てその正義が繼承されていると云うことが出来るが、これをさらに宗教論理の上より考察するならば安心としての三心の正しい解釈を求めることが出来るであろう。

思うに宗教の信仰は衆生と仏と云う如き絶対矛盾した二つの概念が相互に關係し働き合う中に成立するものであつて、これが一種の弁証法的經過を経て救済はなされるのであると考えられる。従つてそこには衆生から仏への向上一面だけでなく、また仏から衆生への向下一面のみでも救済は不可能であり、この意味に於て特に真宗の衆生の意志を否定した信一片道の三心の理解は正しい安心を得る上に大きな誤りを犯していると云つても過言

ではなからう。何故ならば親鸞のこの教義は矛盾した両概念の一方を否定し、一方を肯定することであつて、一元論的見地に立つものであるからである。これは宗教の論理を犯すものである。仮りに仏の大悲が衆生に与えられても衆生がこれを受容しなかつたならば、仏の大悲願力も価値を発揮出来ないであらうし、信ずる主体はやはり衆生に求めなければならない。即ち信は心に通じるものであり、この心は称名の行の中に生きてくると云つてもよい。

また西山派に就いて考えるに、西山では生仏一体説を説くのであるが、矛盾した両概念が一致することは在り得ない。Aは決してBではない。(弁証法的にA Bの両概念を止揚したCとして一致することは出来る)従つて如何にしても仏と衆生が一体になることは在り得ない。若し可能ならば仏が衆生を救済することも、衆生が往生を求める必要もなくなる、何故なら衆生は本来仏であり、仏は衆生に他ならないからである。これはやはり宗教論理を犯すものであると同時に、是の如き教説に於て眞の領解が得られるか、また安心確立が得られるか疑問を抱

かざるを得ない。

以上三派の三心を比較考察し且つ正しい安心を認識せんと努めたのであるが、この論は護宗的色彩粉々たる論難される感を泡かれるかも知れないが、その意とする所はどこまでもそうした立場を離れて、安心としての三心を正しく理解するに在ったのである。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。